

まつ もと ひろ あき
松 本 宏 明

学位の種類 博士（教育学）
学位記番号 教博 第 127 号
学位授与年月日 平成 23 年 7 月 20 日
学位授与の要件 学位規則第 4 条 1 項該当
研究科・専攻 東北大学大学院教育学研究科（博士課程後期 3 年の課程）
総合教育科学専攻
学位論文題目 「家族の意味」を写すメタ理論としての情動的構成主義
論文審査委員 （主査）
教授 長谷川 啓 三 教授 秋 永 雄 一
准教授 安 保 英 勇
教授 正 村 俊 之
(文学研究科)

〈論文内容の要旨〉

本論文の目的は、まず「意味」の側面からの既存の「情報」概念の再検討とその再構成をすることである。そこから家族療法および臨床心理学を捉えなおすメタ理論を提案した。内容を直截に表現して「情動的構成主義」としている。

本論の直接的な土台は、家族療法理論である。社会関係としての家族に着目した家族療法が獲得したのは、時代や状況により心理療法自体が変容しうる、という再帰的視点だが、とくにコミュニケーション派が提示した方向性が、人間の意味世界としての情報への転換であった。本論文で提出される情動的構成主義は、家族療法のこの転換を継承しつつ、社会情報学、生態学的心理学や物語論など、情報についての今日的知見を取り込んで提示されている。

本論は 3 部で構成されている。第 1 部で臨床心理学とそれを取りまく社会的動向から、メタ理論の必要性を示す。第 2 部で、家族療法の流れに位置づけ、具体的方向性を提示する。第 3 部で総合考察として、家族療法や臨床心理学における情動的構成主義の位置づけを提示している。

第 1 部は、情動的構成主義の背景としての臨床心理学の位置を検討している。第 1 章では、日本の臨床心理学の現状を概観している。臨床心理学の「統合」は、多様な問題や矛盾をはらむ現

状に対する問題解決の動きだが、統合の背景にあるさまざまな二項対立そのものについての検討は、ほとんど見られないことを主張している。第2章では、この二項対立の一つである、実証と実践との関連を捉える手がかりとして、実証的臨床心理学の代表的存在である、認知行動療法と基礎心理学との関連を、情報処理モデルを媒介に検討している。そこでは、理論心理学の知見を援用しつつ、心理学の成立に際し無視しえない「社会的要因」について検討の必要を見出した。そこで第3章では、臨床心理学の統合を促す背景としての社会的変容に着目し、「臨床心理学の境界の流動化」「臨床心理学の対象化」、という2つの準拠枠組みを設定し、その検討から、統合モデルとして有力視されている「生物-心理-社会的モデル」は、現在の臨床心理学の社会的状況を反映することが困難であるとする。そこで、新たなモデルとして「統合」に代わる、臨床心理学の「メタ理論」という方向性を示した。

第2部では、コミュニケーション派家族療法が意図した情報の世界への転換の帰結を検討し、意味側面に着目する情動的構成主義の概要と、実践枠組みを提示している。第5章と第6章で、情動的構成主義の背景としての、家族療法理論の展開と課題を、やや詳細に検討している。第5章は、システム論を中心とするコミュニケーション派の理論検討である。基礎理論のひとつであるサイバネティクスモデルを構成する情報モデルは機械論的性格を残しており、本来情報の意味生成の枠組みを目指したコミュニケーション派の方向性を、実際には喪失していたとする。続く第6章では、このシステム論家族療法の限界性批判から生じた、家族療法の言語論的転回に着目する。言語やナラティブに着目しつつも、コミュニケーション派同様意味の枠組みが重視されたこの言語論的転回だが、文脈としてのコンテクストと不可分な意味についての枠組みを保持しないために、臨床実践で共有可能な枠組みとはいいがたいとする。これらの議論から、コミュニケーション派と言語論的転回は、ともに意味生成の枠組みの構築を目指しつつ、結果的に目標を達成しえてない、と結論付け、意味的側面に着目する自身の情動的構成主義の方向性を枠づけ、その有効性を主張する。第7章では、三項関係に着目する情動的構成主義の方向性として、情報理論での「冗長性」概念を、観察者が対象間に確立する同一的かつ差異的な関係としての予測可能性、という意味的側面から捉える Bateson の冗長性概念の検討に力点を移す。第8章では、この冗長性の拡張として、社会情報学から、やはり三項関係から情報を「二重の変換の媒介項」と定義する写像アプローチを援用する。非意味的情報と意味的情報とが区別される写像アプローチでの意味的情報では、内容写像が時空写像と分離しており、脱時空的パターンとしての「意味」が見出されるということになる。

本論文のオリジナルな部分は、第7.8章あたりから始まるが、続く第9章および第10章では、臨床心理学に沿った実践的な枠組みを提示している。第9章では、写像アプローチと生態学的心理学との関係を、意味的情報の内容写像の形式から示している。さらに、生態学的心理学が知覚

の範囲を超える可能性として、始めや終わり、因果関係の知覚枠組みとしての出来事に着目している。第10章では、この生態学的出来事と共通性を持つ言語側面として、物語を意味的情報と位置づける。生態学的心理学、および物語論で共通に援用される入れ子に着目することで、物語の形式的側面と行為側面とをともに捉えた情報作用と位置づけうる枠組みになることを目指している。

第3部は総合的な考察部分であるが、そこでは「意味」へのコードの移行として成立する情報的構成主義の概要を整理し、家族療法や臨床場面への援用可能性を示している。この情報的構成主義そのものは、一般的な臨床心理学のメタ理論をめざしたものだが、家族療法の基礎理論とも位置づけられうるとしている。なぜなら、情報空間としての家族が、われわれ個人にとって意味的情報として、とりわけ特徴的な位置を占めるものであるからであるとしている。

〈論文審査の結果の要旨〉

審査会としては、本論文を、以下の点で評価できると判断した。

- 1 いわゆる「意味」を、写像理論を導入しながら、変換の水準を設定して、平板ではなく次元性とでも呼ぶべき順序を与えたこと、ここから心理的な問題とその解決のヒントが見えてくる点。
- 2 家族臨床心理学領域に於ける議論の焦点の一つであった、システム理論の、やや機械的な理解を「冗長性」概念以外のものでも説明しようとしている点。それを情報の変換、ここに写像的変換が含まれる、から見出される「パターン」とした点。そのことが、意味が意味を拘束するという、主観・客観の枠組みを超えたモデルとなり、提出しえている点。
- 3 家族臨床理論の発祥とも言える二重拘束状況に関連して、「家族」を、その成員に、意味を見出すべく、すでに拘束しているコンテクストとして見る視点の提案。
- 4 心理的「問題」とは、上記のコンテクストに於いて、それが果しえていない事態と見る視点。
- 5 本論文が、いちいちの実証的な研究を超えた、メタ理論を提案し、それが部分的にも成功していると思われる点。

家族を、その成員に、意味を見出すべく、すでに拘束しているコンテクストとして見るという、本論文の視点は、たとえば、家族の中に、いま産み落とされた新生児の心理的発達を、家族共通の意味、それは多分、人類共通の意味に連なるものの獲得と生成という視点で見ることを可能にし、臨床心理学をも越えた「メタ理論」たる点を部分的にも示すものと言える。

本論は上記の点で優れた視点を提供しているが、臨床心理学という、より具体的な学問領域で一般性をもつものになっているかどうかという点では、将来に期待せざるを得ない点がなくもな

いと感じる。たとえば Wynne の「偽相互性」や「偽敵意性」といった家族の病理的心理の古典的概念を、この理論で説明することはできると思うし、その視点で初めて見えるものがあると感じるが、緊急事態での心理的問題や、成員ではなくて、コンテクストたる家族やコミュニティー全体の側の問題に対処し得るものを提案しているかどうかといった点である。

しかし本論文は、すでに出版され、一定の評価を得ている論文を中心に、博士論文として、表題の下に意図を一貫させたものである。実験や調査を支える代表的な臨床心理学理論とその関連の理論を詳細に検討し、「統合」という現在多く見られる流れを批判して、「メタ理論」の重要性を説き、具体的には、従来、臨床心理学で出されてきたいくつかの重要な概念を、情報と意味の視点から俯瞰できるものを提案している。本論文は、具体的な内容で、現在のこの分野の研究水準にかなっているものを多く持つのは勿論、メタ理論的研究という、我が国のこの分野では決して多くはない、研究形態で、臨床心理学の問題を扱った、最初の牽引的なものとしての意義を持つとあってよい。

よって、本論文は博士(教育学)の学位論文として合格と認める。